

## 現場から ④ 支える視点から

「どうしても床が外れなくて、乾燥させた所があるのですが」。岡山県倉敷市真備町有井。51人が死亡した真備町地区の中でも犠牲者が15人と最も多かったエリアで、ボランティアの岩手県野田村職員、式又正貴さん(47)と岩手医科大(精神神経科学講座)の地域コーディネーター・神先真さん(46)は、被災した原田勝樹さん(51)からこう頼ま

外れない床板は1枚。だが、浸水で屋根が持ち上げられた家は、玄関の柱がずれていた。周囲の家や商店は、柱や窓枠を残してがらんと開け放たれて

語った。そのうえで被災者自らが心の変化に気づけないケースも多い。必要なサポートを受ける態勢作りが求められます」と指摘した。2人は岩手県久慈市を拠点とするNPO法人北いわて未来ラボの副理事だ。今月2日、西宮市のNPO法人「日本災害救援ボランティアネットワーク」(NVNAD)、四川大地震(2008年)の被災地で活動する中国の「新安世紀教育安全科技研究院」、大阪

「ボランティアが少ないことが気になった」。式又さんはこう話し、「いかに住民主体のプロセスを踏み、復旧にプラスアルファを考えられるかが重要」と続けた。神先

「阪神大震災や東日本大震災など」で募金は

「顔を覚えて言葉を交わすうちに新たな課題や相談が出てくる。可能な限り心えていくことがボランティアの役割なんです」。渥美教授は継続した支援の重要性を指摘し、真備町地区の西隣で支援の手が足りない矢掛町でも活動を続けている。



土砂をかぶり、ブドウは干からびていた

# 長期化見据え継続を

んは「災害直後はカラ元気で突っ走ってしまいがちですが、どこかで思うように進まない現実と直面します」と

と一緒に作業した大阪大人間科学研究科博士課程3年の宮前良平さん(26)は、今も東北で土砂に埋もれた写真の復元作業を続けている。「復元された写真が節目に必要な場面も見た。ここでも役に立ちたい」と話し、

「顔を覚えて言葉を交わすうちに新たな課題や相談が出てくる。可能な限り心えていくことがボランティアの役割なんです」。渥美教授は継続した支援の重要性を指摘し、真備町地区の西隣で支援の手が足りない矢掛町でも活動を続けている。



1カ月が過ぎても、まだ水が引いていない場所もあり、建っている家は浸水被害の爪痕が残っていた



ボランティア活動に参加した中国の「新安世紀教育安全科技研究院」「北いわて未来ラボ」「日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)」「大阪大大学院人間科学研究科」のメンバー

豪雨災害で初めて「特定非常災害」に指定された西日本豪雨。激甚災害にも指定さ

【高尾員成】